

道の駅「伊豆月ヶ瀬」 風景と暮らしをつくる交流拠点

～狩野川、天城の山々と調和した新たな観光資源の創出～



すずき まさひろ
鈴木 政宏*

静岡県伊豆市において伊豆縦貫自動車道天城北道路の開通に伴い狩野川を大切な資源ととらえ、住民と来訪者が共有できる地域活性化と交流拠点としての整備を行った道の駅「伊豆月ヶ瀬」の事例を紹介する。

1. はじめに

道の駅「伊豆月ヶ瀬」は、伊豆縦貫自動車道天城北道路の月ヶ瀬IC開通により伊豆半島南西部の新たな玄関口として、防災機能と地域振興機能を併せ持った施設として、国・県・市・地元の4者が力を合わせ、地域住民と来訪者の新たな憩いの場として令和元年12月14日に開駅した施設である。



図-1 位置図

2. 周辺風景との調和

1) 地域の特性を生かす

当駅の位置する、天城湯ヶ島地区（静岡県伊豆市）は、狩野川の上流域にあり、谷あいの溪流の景観とともに自然のままの美しさが残る天城連山とそこか

表-1 施設の概要

名称	道の駅「伊豆月ヶ瀬」
所在地	静岡県伊豆市月ヶ瀬78-2
延床面積	990.29㎡
施設	駐車場59台、トイレ19器 (うちオストメイト付2器) カフェカウンター、レストラン「月ヶ瀬テラスキッチン」、地場産品直売所、情報・サイクルステーション、多目的スペース、防災倉庫、水際公園
開業日	令和元年12月14日

ら育まれるおいしい水、わさびや椎茸、イズシカ（ジビエ）など多くの地場産品に加え、日本を代表する文人墨客たちに愛された文学の郷であり、また温泉など多くの資源に恵まれた地域である。

2) 構想段階から地域と協同で計画策定

この特性を生かすために国土舘大学二井昭佳教授を委員長とし、地元自治会、観光商工関係者、農協女性の市民代表等により構成された協議会や市民有志によるワーキングで地域全体の将来像とIC周辺の活性化構想に関する検討が行われ、平成27年度末に月ヶ瀬地区への道の駅整備の必要性が伊豆市に提言された。これを踏まえ、平成28年度に道の駅基本計画・基本設計の公募型プロポーザルを実施し、「風景と暮らしをつくる道の駅」を整備コンセプトとした基本計画を策定し、市民要望の強かった水際公園と建築物が有能的に繋がり、周辺の風景と調和する施設計画となった。さらに、指定管理予定者と

*伊豆市 産業部 観光商工課 主査

事業運営計画を踏まえたうえで、施設配置や造成計画・色彩・仕上げなども含めた調整を行いその結果、狩野川沿いの立地を生かしたトータル的なデザインとなった。



写真-1 狩野川と一体となったデザイン

3) 共通認識と綿密な調整

一般的な公共空間の整備においては、主体の違いや所謂「縦割り」によって、近接する整備が十分な調整がなされないまま進められた結果、まとまりのない風景となってしまう事例は多く見受けられる。

今回も複数の整備事業が同時に進められたため、事業区域【道の駅地域振興施設・水際公園：伊豆市】【道の駅道路休憩施設（駐車場等）：国（国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所）、県（静岡県）】が複雑だったが、計画段階から施工に至るまで国・県・市による連携した綿密な調整により、基本計画で策定した景観デザインの施設を実現できた。



国土交通省提供

写真-2 道の駅「伊豆月ヶ瀬」全景

4) 川と向き合う風景

全国には、1,100を超える道の駅が整備されているが、川沿いに立地しているもの自体がそれほど多くなく、その中でも川との関係を上手く構築できている事例は稀有であると言える。

この地域における狩野川への存在は、ただ清らかな

流れで地域の生活に溶け込んでいるだけでなく、わさび栽培やアユの友釣りといった産業・文化を育んできた重要な資源である。

本施設では、川に対して開かれた設えにすることで川との視覚的な繋がりを創出するとともに、水際公園やテラスを含んだ一体的な空間を形成している。この景色の獲得は、地元住民や関係各団体とともに検討・調整を行った成果であり本施設の最大の特徴として他の道の駅との差別化に寄与している。

また、テラス席から一望できる伊豆縦貫自動車道天城北道路矢熊大橋（上路式RC固定アーチ橋）の佇まいは見事であり、その造形美は周辺風景と見事に調和している。



写真-3 テラス席から一望できる狩野川と矢熊大橋

5) 地場材と継続性

川に向かって緩やかに下る地形を活かすため2階建の施設を川寄りの低いレベルに配置し内部に吹き抜けを設け、大空間を実現するために鉄骨造で屋根は地場のヒノキを現して用いた木造を採用し、適材適所の構造形式とした。



写真-4 屋根の構造材に地元のヒノキを活用

特殊な工法を用いず在来の技術で構成するとともに、スギやヒノキといった地場材を建物の構造材・仕上材として積極的に活用することによって、地域の林業・建設業が継続的に建物の維持管理にも関与できるように配慮した。

3. 多彩な顔

1) 地域住民の日常の居場所

伊豆市も全国の市町村が抱える難題である人口減少や少子高齢化が進み、公共施設の移転・統廃合等による地域コミュニティの希薄化への対応が求められている。地域の人たちが日常的に利用し、子育てや多世代の交流の場としての「居場所」づくりを目指し子供たちを遊ばせることができる水際公園や施設内には、地域の会合などができる多目的スペースを確保した。物販エリアでは、地域住民の暮らしの支えとして日々の買い物ができる品々も取りそろえている。

2) 地域経済活性化の拠点

狩野川に面した自然風景を活かした屋内外の空間を整備し、地場産品の直売所や地産地消のメニューを取り入れた食事処などを配置することにより地元農産物を使用した加工品などの販売により、地域の6次産業化にも貢献している。



写真-5 様々な商品がならぶ物販エリア



写真-6 地産地消のメニューを取り入れたレストラン

3) 災害時の機能と情報発信

伊豆市は、全国でも指折りの年間降水量を誇る天城山があり、土砂災害による通行止めなどにより道路利用者、観光客等の行動制限が発生する恐れがあるため、一時的な避難所として駐車場の帰宅困難者への開放、食料や毛布等の物資提供を行うことが可能である。

また、伊豆縦貫自動車道天城北道路は災害時にライフラインとして機能する高規格幹線道路であり、当駅の接する国道414号は緊急輸送道路に指定されている等、防災拠点として機能可能な位置にあることから、応援部隊や救援物資の受け入れ「基地」としての役割も担う。

平時においては、交通情報や気象情報などの提供を行い、また地域に密着した観光情報はもちろんのこと、伊豆半島全体の広域的な観光情報の提供も行っている。

また、伊豆市は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の自転車競技（トラックレース・マウンテンバイク）開催地としてサイクリストにやさしいまちづくりを目指しており伊豆半島を訪れる利用者の休息・交流の場として、この道の駅をさらに活用できるよう努めていきたい。

終わりに、地域住民はもちろんのこと、観光客にもさらに満足いただける交流拠点施設となるよう努力していきたい。

【著者紹介】 鈴木 政宏（すずき まさひろ）

昭和51年生まれ。静岡県立三島南高校卒。平成7年旧天城湯ヶ島町役場（現伊豆市）採用。建設部用地管理課主査等を経て現職。